

編集・発行 愛媛資料ネット（芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛）
〒790-8577 松山市文京町3 愛媛大学法文学部寺内研究室気付
TEL 089-927-9317 Eメール terauchi@LL.ehime-u.ac.jp 郵便振替 01690-8-5497

「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」の開催とその意義 —「史料の救命士」の輪を広げる—

河野 未央

はじめに

歴史資料ネットワーク（以下、史料ネット）は、2004年、台風23号による風水害被害からの歴史資料救出・保全活動を実施したⁱ。その後2009年には台風9号による兵庫県西部（佐用町・宍粟市等）の被害においても歴史資料の救出・保全活動を展開しているⁱⁱ。2004年以降、水害対応とともに史料ネットが力を入れてきたのが「水濡れ史料の吸水乾燥ワークショップ」（以下、WS）である。



水濡れの被害にあった紙史料については本論で述べるように早急に乾燥処置を施さなければならない。史料ネットでは史料の救出活動に際して、機械（真空凍結乾燥機）による乾燥作業とともに、手作業での吸水乾燥作業を行ってきた。手作業での吸水乾燥作業は、修復の専門家が行う本格的な措置ではなく、いわば「応急措置」であり、それゆえ作業自体は、身の回りにある物品を利用した「いつでも・誰でも・どこでも」「安くて（ローコストで）・簡単に」行える作業である。WS は、このようなノウハウ・経験を伝えることを主たる目的としている。

WS の参加者の中から、災害時に被害に遭った民間所在史料を「廃棄（＝史料の死）」からギリギリのラインで救う「史料の救命士」が誕生すること、またその輪が広がることを願い、これまで数多くの WS を実施してきた。

1. ワークショップ実施の経緯と経過

そもそも WS で行うのは何故「応急措置」なのか。第一に、水損史料へは迅速な対応が求められること、第二に、後述のように災害時様々な事態が想定されるなかで大量の史料群に対して吸水乾燥措置をとらなければならないことから、高度な専門性や物品、技術を要求されることなく、「誰でも」できる作業こそが現実の災害への対応としては有効であることがあげられる。

第一の点は、史料が浸かる「水」の問題がある。河川から流れ込んだ泥水、あるいは下水道から溢水した生活排水によって史料は汚損される。汚損によるカビの発生、細菌による史料自体の腐敗の危険があり、さらにそのまま乾燥した場合は史料の固着などがおこる。そのため、一般に水損史料はカビが発生するまでの 48 ～ 72 時間の間に冷凍処置を行うことが必要だと言われているⁱⁱⁱ。冷凍保存した史料は、真空凍結乾燥機で乾燥させる。風水害については広域的に被害が及ぶことが多いため、大量の史料群が一度に被害に遭う場合もある。したがってこのような措置を一度に行うことができるのが「理想」である。

しかし、実際の災害時に、はたして史料の冷凍処置ができる施設・設備がすぐに確保できるのであろうか^{iv}。また日本国内においては、真空凍結乾燥機を有する施設も限られている。そのようななかで、すぐに乾燥機を未指定の民間所在史料も含めて使用することができるだろうか。現状では、水害からの史料保存活動は、体制面・組織面で様々な問題が残されている。かかる現状にそくして考えた場合、どのような状況下でも即座に対応・実施できる処置＝「応急

措置」の普及こそが何よりも求められているといえよう。

第二の点については、2004年の史料ネットで初めて行った乾燥作業の経験によるところが大きい。当時の史料ネットでは、史料救出の直後、史料の冷凍から機械による乾燥という一連の「理想」の手順を実現できなかった。救出作業から約1ヵ月が経過してようやく史料の冷凍保管がかなったのである。その間の代替手段として行われたのが、ボランティアでの手作業による乾燥作業であった。大量の史料について一度に処置を施す必要があったため、作業に従事するボランティアの人数もまた大量に必要であった。そのため、文化財保存関係者だけでなく学生、市民等々広く呼びかけ、作業人員を募った。

呼びかけに応じ、様々な立場から、様々な方々がボランティアとして駆けつけてくださった。しかし、当然ながらそうした方々の大半はこれまで吸水乾燥作業の経験が全く無かった。何よりボランティアの方々に指示する立場にあった筆者自身が、修復に関しては全くの「素人」であった。ゆえに、作業においては、専門家の方々からアドバイスをいただきつつ、「誰にでも」できる方法、最も簡易な乾燥方法をその時々を選択していくことになった。試行錯誤はあったが、結果としてこうしたボランティアの力で、少なくとも数百点の史料は、滅失の危機からまぬがれることができたのである。

以上のような経験から、作業従事者に修復の経験が全く無くても、濡れた史料を「乾かす」こと自体はある程度は可能だということがわかった。多くの人々が乾かすための知識をもっていれば、万一の際の災害が起こって被害に遭ってしまった民間所在史料でも、ギリギリのラインで滅失（「史料の死」）の危機から救うことができるのである。「史料の死」という最悪の事態を水際で食い止めるために、場合によっては現場で行うこともできる簡便な処置方法＝「応急措置」を普及し、その作業従事者＝「史料の救命士」の輪を広げていくことが、現状では最も必要であるとの認識にいたった。以上が、史料ネットではWSを継続して行っていくことになった大きな理由である。

もっとも「紙史料もまた水害で被害にあっても救うことができる」こと自体、当時は一般には認知されていなかった。そもそも筆者自身も実際に風水害被害の対応を行うまでは、史料が泥水に浸かった段階で「もうだめだろう」と思っており、まさか救出の道があるとは考えていなかった。こうした認識を変える役割も、WSは果たしていたように思う。

WS開始当初は、史料ネットから関西圏の大学の史学科を中心に働きかけ、

持ち出しで細々と企画を行ってきた。しかし、近年、地球温暖化現象に伴う異常気象（ゲリラ豪雨）などによる被害が各地で起こるようになると、史資料館・博物館・図書館といった史料保存機関やその関係者、あるいは学会等を中心に史料の水害対応についての関心が高まっていったようだ。全国各地から WS の開催依頼が入るようになった。2010 年 6 月 19 日に、愛媛資料ネットでも開催させていただいたのは、水害対応の経験を共有したいと考える史料ネットとしても、本当にありがたいことであった。

史料ネットの側でも、こうした WS 開催依頼の増加に十分対応できるようになっていた。それは何より、若手メンバーの活躍によるところが大きい。2009 年佐用町水害対応に関わった若手の中心メンバーが、自身が実践した「応急処置」技術を伝える WS 講師を務めるようになったからである。実際、愛媛資料ネットでの WS 講師も、若手メンバーが主体となって務めた。

2. ワークショップの内容

次に、WS で行う作業について説明したい。

WS は二部構成で行う。第一部は史料ネットの水害対応における実践例の紹介である。ここでは風水害被害の特徴、実際の救出活動の様子などを講師が口頭で紹介する。それらをふまえ、第二部の実際の作業に入る。まずは講師が作業手順を実演し、その後参加者の方々に作業を体験していただく。

史料ネットが救出してきた民間所在史料には、古文書だけではなくパルプ紙やファイルなども含まれた近現代史料、さらに写真・フィルム等様々なものがあった。しかし時間等の制約もあり、WS では和紙を縦帳・横帳等の帳面に綴った、文字の書かれていない白紙のサンプル史料を使用している。そしてサンプル史料を水道水に浸したのちに、ペーパータオルで吸水乾燥するのである。水道水より泥水を利用した方がよりリアルであるが、衛生面の問題、準備等の関係から水道水での作業としている。もっとも作業にあたっては参加者に泥水に浸かった文書が発する「匂い」の問題とともに、作業中の衛生面における配慮等について、実際の作業現場をできるだけイメージしていただきながら作業できるように、講師は注意を促すことにしている。史料が乾燥した時点で、作業終了となる。

なお、WS で導入した新たな試みとして、史料の作業中の計測がある。史料の乾燥過程を実感できるように、はかりを用意し、水に濡らす前・水に濡らし

た後・作業中・作業後に計測を行う。作業が進めばサンプル史料からは水分が抜けていくので重量は次第に軽くなり、水に濡らす前の数値に近づいていく。こうしたはかりの利用は、数値によって「乾燥」の程度を実感できるためわかりやすく、参加者からの好評を得ている。

3. ワークショップの展開の先に－日常時の史料保存へ－

史料の応急措置を覚えていただく、という以外に、WS のもうひとつの成果として、参加者が災害への予防的措置という観点から、日常時の史料保存へ目を転じるきっかけになることがあげられる。史料を吸水乾燥する作業自体は、「誰でも」できる作業であり、非常に簡単である。しかし、長い時間をかけて、1点の史料を丁寧に吸水乾燥していくのは、根気の必要な地道な作業である。こうした作業をしなくても済むように、すなわち、きたるべき災害からいかにして史料を守るか、そのためにはどのような準備が必要なのか、ということに参加者は思いをめぐらせることになる。

WS の場では、また、史料保存のために地域が直面している問題を具体的に聞くこともできる。参加者から、災害・世代交代の際の史料散逸の情報も少なからず寄せられた。筆者は、失われた史料について情報共有を行うこと、どのようにして失われてしまうかを具体的に知ること、今幸いにも残っている「身近な」史料を今後守り伝えていくためには、重要な作業であると考えている。そこで情報提供者には、乾燥作業をしながら、差し支えない範囲で他の参加者にもできるだけ「失われた史料」の話を披露していただくことにしている。

WS ではまた、史料の所蔵者が参加されることがある。そうした所蔵者の方から、日常時における地元の方々の史料保存に関する悩みなどを聞くことも多い。WS に参加されること自体、史料保存への意識の高い方々であるのだが、そのような方々が求める技術・知識が提供できないことに申し訳のない思いを抱いたことも多かった。相談の中には、少なからず本格的な修復が必要と判断されるようなケースもあった。未指定文化財の地域における価値の高さを説き、守ることを訴えても、守り続けるその行為自体は所蔵者に負うところが大きいという現実がある。その現実には、重く受け止める必要があることなど、WS を通じて、私たちもまた地域から多くを学ばせていただいている。

ところで、先述したように、2009 年以降の WS では、佐用町・宍粟市等で台風 9 号対応に従事した史料ネットの若手メンバーもまた講師を務めるように

なった。彼らによって新たな観点から、独自の史料保存 PR が行われている。佐用町・宍粟市等被災地では救出した史料を用いた「現地説明会」を実施し、地域史料の価値を説いていた。また、別の地域で行われた WS では、災害が起こった直後に作成される災害関連資料の保存についても言及した。現代に作成されるものについても、一般に歴史研究者がいう「史料」について、地域の方々とイメージを共有するのにこうした話はとても有用であると考えている。

むすびにかえて

原稿を執筆している最中、とてもショッキングな出来事が起こった。唐突な感があるかもしれないが、最後にこの出来事に触れてから筆を擱くことをお許し願いたい。

その出来事とは、2011年3月11日に発生した、東日本大震災である。改めて、この震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災され、不便な生活を強いられている方々、原発事故の影響で不安な日々を過ごされている方々へ心からお見舞い申し上げたい。そして、一日も早く皆様が安心出来る生活を取り戻すことが出来るよう、心より祈念したい。

当日、遠く離れた関西にいた筆者は、津波が町を飲み込む映像に愕然としていた。人命が、日常の生活が、景観が、そして歴史が、文化が、「集落ごと」消えていく瞬間であった。

個人的には、1995年阪神淡路大震災以降、地震・水害についていくつかの被災地を回った経験もあり、災害の状況は把握している「つもり」だった。WS開催には、そうした自身の経験の蓄積が少なからず下支えとなっていた。しかし…である。未曾有の災害、自然の驚異は、自然災害に対応できるという筆者の「思い上がり」を嫌というほど認識させられた。「思い上がり」と書いたのは、今回については、被害状況を目にして自らが何をすべきか、どう対応すべきか、瞬時には何も思い浮かべることができなかつたからである。

その一方で、すぐに浮かんだのは「災害対応の方法」として各地をめぐり、意気揚々と意義を伝えてきた WS のことである。今、何ほどもできない筆者が、述べてきた言葉は、実践してきたことは、どれほどの意味があったのだろうか…。刻一刻と明らかになる被災地の情報を注視しつつ、できることをあれこれと考えながらも、混乱・苦悩する日々が続いていた。

しかし、この大変な状況下において、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワ

ーク、ふくしま歴史資料保存ネットワーク、山形文化遺産防災ネットワーク、新潟歴史資料救済ネットワークと、被災地及び被災地近隣のネットワークが、次々と活動を開始していた。そうした姿を目にしたとき、やはり「何もできない」ではすまされないだろう、と思った。

たしかに、WS で実施したことは未曾有の大災害を前に、何ほども役には立たないかもしれない。伝えてきたことも、今回に限っては意味をなさないかもしれない。それでも、被災者の方々一人一人の「思い出」「記憶」を守るための最大限の努力を怠ってはならないだろう、と思う。なぜなら WS は、何より被災地の「心の復興」の手だて、あるいはそのために必要な技術のひとつを伝えるための手段として開催されたものであったはずなのだから。お恥ずかしい話ではあるが、各地のネットの活動を見て、ようやく技術ではなく理念に、もっと言えば初心に立ち帰ることができたのであった。

この間史料ネットでは、若手メンバーを中心に、各地の被害状況等の情報収集と発信、ネットの支援のための募金活動、さらに写真の保存・修復のための応急処置についての情報発信など被災地のネットを後方支援を精力的に行っている。写真の応急処置に触れたのは、被災地で写真を拾うボランティア活動が行われているとの情報を得たことによる。報道が当初より「思い出」や「記憶」について触れていたこと、そのなかで「残す」ボランティアが被災地で登場したことから、そのための支援をまずは行っていこうということになった。

「心の復興」に関わる活動は、非常に長期にわたらざるを得ない。だからこそ、今回の震災については、覚悟をもって、活動にあたりたい。皆様には、今後とも被災地の各地のネット及び史料ネットの活動について、ご支援及びご理解・ご協力をたまわることができれば幸いである。

¹ 詳細は松下正和・河野未央編『水損史料を救うー風水害からの歴史資料保全ー』（岩田書院、2009）を参照のこと。

² 拙稿「台風 9 号により被災した歴史資料保全活動について」（『全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報』86、2009 年 10 月）、板垣貴志・吉原大志「災害時における歴史資料保全活動とその方法ー歴史資料ネットワークの取り組み現場からー」（『専門図書館』241 号、2010 年 5 月）、吉原「2009 年台風 9 号によって被災した歴史資料の保全・救出活動ー歴史資料ネットワークの取り組みを中心にー」、加藤明恵「史料レスキュー活動に参加して」、和木麻佳「史料レスキューに参加して見えたもの」（いずれも『神戸大学史学年報』第 25 号、2010 年 6 月）。

松下正和「風水害による水損歴史資料保全活動」（『災害と記録』4号、新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、2010年3月）、「シリーズ新自由主義時代の博物館と文化財歴史資料ネットワークによる水損史料救出活動について—2009年台風9号への対応を中心に—」（『日本史研究』575号、2010年7月）、「落合重信記念賞受賞記念講演二 被災史料の救出と地域遺産—風水害への対応を中心に—」（『歴史と神戸』282号、2010年10月）等を参照のこと。なお、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター紀要『Link』第2号（2010年8月）では松下氏によって「風水害から歴史資料を救う—2009年台風9号被害をめぐる—」という小特集が生まれ、救出活動にたずさわった様々な立場の方々の報告を一覧することができる。

iii また身近な事例として、写真プリント及びフィルム類については一刻も早い乾燥と、専門家に修復を依頼することが必要である。

iv 被災地では停電状態が続くことも想定されるため、冷凍保管庫が仮に確保できたとしても冷凍措置がとれない可能性もある。また、交通路が遮断・規制されることも想定できるため、運搬手段をいかに確保するのも難しい問題である。

v 匂いについては、余裕があれば実際に乾燥作業を終了した史料をWSの場に持参している。6年前に被害に遭った史料にもかかわらず、いまだ史料には匂いが残っている。参加者には史料を見ていただき、匂いを体感してもらう。なお、水濡れ被害に遭った史料を乾燥した後も、史料が発する匂いは最も大きな問題として残っている。

調査・整理活動、その他

◆昨年6月に愛媛大学で「水損史料修復ワークショップ」を開催しましたが、その際ご指導いただいた河野未央氏に文章を寄せていただきました。

◆昨年度の愛媛資料ネットの活動には、科学研究費補助金（基盤研究(s)、研究課題名：大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築、研究代表者：奥村弘）が使用されています。

愛媛資料ネット活動日誌

・11月27日

愛媛大学でふすまの下貼り文書はがし作業（18名）